

研修報告書 No. 7

研修先：嶺北中央病院

2023 年の 5 月から 6 月にかけて高知県にて地域医療研修を行いました。今回私が研修した内容について報告をします。

私が研修を行った嶺北中央病院は、本山町という高知市内から車で 1 時間ほど北に進んだ四国の中央部、人口 3500 人ほどの町に位置します。本山町は出荷量が少なく幻の和牛と言われる土佐あかうしや、名産の紫蘇を使った紫蘇ジュース、ブランド米を活かした日本酒などが有名で、周辺では野生の蛍が観察できるほど澄んだ空気と水が特徴的です。病院の窓からは四国三郎として有名な徳島県まで続く吉野川と沈下橋を眺め、梅雨で大雨が続いた際は水位が上がり、沈下橋が濁流に飲み込まれる様子を見ることも出来ました。

嶺北中央病院は一般病床 55 床、医療型療養病床 44 床の計 99 床を有する二次救急の病院で、近隣の土佐町や大豊町からの救急搬送も積極的に受け入れています。二次救急の病院であるため比較的医療資源やスタッフが豊富な環境にありましたが、それでも外傷や手術、緊急性の高い管理が必要な疾患等は高知市内にある三次救急の受け入れをしている病院に転送をする必要がありました。研修では様々な外来を見学しましたが、内科、外科以外のほとんどの外来は大学等から週 1 回派遣される先生方により成り立っており、大学や高度医療センターと地域病院の結びつきを実感することが出来ました。

往診にも何度か同行しましたが、どの診療所も車での移動が必須で、頻回に訪れることができるわけではないため、薬剤も次回分を意識して処方を考えることが必要となっていました。

往診や外来に来られる患者さんはマルチプロブレムを抱えている方も少なくなく、全ての科にまたがった広範な知識が必要とされていました。普段比較的大きな病院で働く中で、専門外の疾患に関してはすぐに他科に診察依頼をして診てもらう形をとることに慣れきっていましたが、研修を通して総合的な医学知識の重要性を改めて実感することが出来ました。

また、医学だけでなくソーシャルの調節についても普段とは異なる様子を見ることが出来ました。都市部で医療を行っている多くの方は電車やバスといった公共交通機関を用いて移動を行い、マンションなどの集団住宅に住む方を診ることがほとんどですが、研修先ではほとんどの患者さんが、一戸建ての自宅から、車で家族等の助けを借りながら通院をされていました。介護認定に向けて調整を行っていたある家庭では家の玄関に辿り着くまでに田畑の畦道を抜ける必要がありその道の整備も含めたサポートが必要な状態でした。都心部の病院で退院が決まった場合は今後の通院方法や周囲の道の状態まで細かく配慮して社会調節することは必ずしも必要ではありませんが、地域で患者さんの退院が決まった際

には更なる配慮が必要になることを学びました。

研修中はリハビリテーションの様子を見る機会もありました。もちろん普通の研修病院でもリハビリテーションは行われているのですが、研修先ではより実践的に退院後の家での日常動作に重きを置いて行われていました。院長先生が「ただ病気が良くなるだけでなく、ちゃんと家に帰って普段の生活できるようになるまで診るのが私達の病院の役割」と仰っていた内容が実践されていることを目で見えて感じる事ができました。

救急外来では通常の救急症例に加えて普段自分が医療を行っている地域ではなかなか診ることが出来ないマムシによる咬傷を経験し入院の管理に携わると同時に、ヘビ咬傷に関する論文を抄読会で発表しました。このような珍しい症例を経験することが出来たことも地域医療研修ならではの魅力であると感じます。

全体を通して 1 ヶ月間病院の先生方や患者さん、皆様の暖かい人柄の中大変充実した研修を行うことができました。お忙しい中、教育的に指導をしてくださった嶺北中央病院の先生方、暖かく迎え入れてくださった医療スタッフの皆様、受け入れに際し様々な面でサポートをしてくださった高知医療再生機構の皆様をはじめとしたすべての関係者の皆様にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。